

「土木歴史学」の提唱



土木学会 第105代会長
大石 久和

あけましておめでとうございます

本年が土木学会会員の皆様にとりまして、より幸多い年になりますよう祈念申し上げます

会長として特別委員会を三つ立ち上げていますが、そのなかに「安寧の公共学懇談会」があります。筑波大学名誉教授の石田東生先生に座長をお願いして、「土木Ⅱ安寧の公共学」ととらえ、土木を幅広く考える試みが続けています。

このなかで、土木が新たな時代を切り開いてきた事例を収集・編纂して出版したいと考えています。そこで、正月の話題に一つの事例を紹介したいと思います。

武家時代の終焉は幕末の明治維新・廃藩置県ですが、では始まりはと言えば、最も遅くとらえると頼朝の鎌倉幕府の開府になるでしょう。しかし、ここに至るまでの間には長い年月をかけた貴族政治・公家政権の崩壊がありました。

清盛の太政大臣就任よりはるか以前、さらに摂関政治が全盛期になる前に、すでに公家政権を支えていた口分田の公収が立ちゆかなくなり始めていました。荘園が乱

立し、それを管理する武士が実質的な力を蓄えていく時代が始まったのでした。

そのきっかけの一つが天慶の乱と呼ばれる平将門の乱でした。結局は鎮圧されてしまう反乱でしたが、一時は将門が関東一円に覇を唱えました。それを可能としたのは、将門が数千人の軍を率いて、常陸・下野・上野・武蔵・相模・下総など、関東中の国府をわずか3〜4カ月の間に駆け巡って戦い、これを制圧することができた移動力でした。

それは、広幅員で直線性にすぐれた古代官道存在の賜だったのでした。古代官道がこの時代にも何とか使える形で残っていたのです。そして、その官道が将門の活躍を通じて武家時代への導入口ともなったのです。

また、古代官道は大和朝廷による口分田の全国的展開を可能にするなど、律令国家を支える重要なインフラでもありました。歴史学はインフラが歴史に与えた影響にまったく関心を示しません。土木こそが時代の変遷を可能としたのは確かな事実なのです。